

連載 45 『新しき土』(1937年) 日独合作映画の実像

『新しき土』は日独合作映画でドイツ語のタイトルは『Die Tochter des Samurai』。『サムライの娘』『侍の娘』『武士の娘』などと訳されている。ドイツ語版監督はアーノルド・ファンク (Arnold Fanck 1889 - 1974)、日英版監督を伊丹万作 (1900 - 1946) がつとめた。撮影はリヒャルト・アングスト (Richard Angst 1905 - 1984)、これに円谷英二 (1901 - 1970) が協力している。音楽・山田耕筰 (1886 - 1965)、装置・吉田謙吉 (1897 - 1982) と錚々たるスタッフだった。当時としては破格の製作費をかけた壮大な実験作だった。

物語の概要は——8年にわたってドイツに留学していた大和輝雄 (小杉勇) が恋人のゲルダ・シュトルム (ルート・エヴェラー) を伴って帰国する。しかし輝雄には、親の決めた許嫁・光子 (原節子) がいた。輝雄が旧来の日本の価値観ともども許嫁の自分を否定するのではないかと絶望した光子は死を覚悟するが……。

プロデューサー川喜多長政 (1903 - 1981) は、日本映画の海外輸出を前提とし、ドイツと組んで国際映画を製作しようと模索していた。できれば英語圏にも輸出したかったのだが、それはほとんど叶わなかった。映画による日本紹介という川喜多の夢は、満洲事変、満洲国建国、国際連盟脱退と、孤立する日本をなんとか国際社会に開くことを企図していた。しかしながら海外では、ドイツ映画・文化映画という括りで流通し



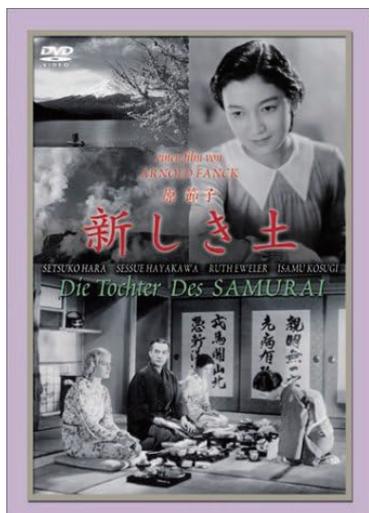
『新しき土』(1937年) 広告
『キネマ旬報』(1937年4月21日号)

ていた。

山岳映画を専門とするファンク監督は、劇映画の機微に通じていたのか、日本文化の紹介者としてふさわしかったのか。鳴物入りの宣伝で日本国内の観客動員は成功を収めたが、辛口の批評があいついでいる。

「あれ程の大掛りを以てして、この程度のものしか出来上らなかつたのか」(内田岐三雄「各社試写室より『新しき土 日英版』『キネマ旬報』1937年2月11日号)、「[ファンクの『新しき土』を見ました。あの映画が観衆に与へる阿片的役割のことを考えると憂鬱になります]——と言つてきた友人がある」「言ふならば「山男の詩情」ゆえに値打のあつた山岳映画の製作者アーノルド・ファンクは、下界に降りてナチス御用作家となり、そのまゝ日本に招かれて、輸出向きの観光宣伝映画をつくつたやうな恰好になつてゐる」(飯田心美「主要日本映画批評」『キネマ旬報』1937年3月1日号)。

読者の投稿も手厳しい。「個人主義は欧米の悪風である、家族主義こそはこの国の尊き伝統である、と言はれやうと。この国の若きインテリゲンチヤはその言葉の抽象的のみで悩む程愚かではない。家族主義を崩潰せしめるものは欧米の個人主義思潮の侵入からで



『新しき土』DVD パッケージ
(アイ・ヴィー・シ販売、2003年)

はなく、実にこの国の現実の経済的歴史的事実の所産であり、その反映であるに過ぎないことを知つてゐる」(磯洋「新選読者寄書 「新しき土」の文化性 — 日本の現実とその性格に関連して」『キネマ旬報』1937年3月11日号)。

『新しき土』は、日本流の家族愛と光子への愛に目覚めた輝雄が、満洲へ移住して農民となり家族の居場所を築くところで終わる。ナチスの御用作家の視点で切り取った日本の家族主義と満洲移民の正当化と評されるゆえんである。

しかしながらそもそもアーノルド・ファンクは、ナチスの御用作家として日本に招かれたのだろうか？「ファンクと監督協会 座談会」(『キネマ旬報』1937年1月1日号)では、以下のようなやりとりがなされている。

鈴木(重吉) 現在ドイツぢや、やつぱり仕事がやりにくいでせうね。

川喜多(長政) それはやりにくいでせうね。然しさういふことは皆なだれも言へないでせう。ファンクさんも口には出しません。

瀬川裕司『『新しき土』の真実 — 戦前日本の映画輸出と狂乱の時代』(平凡社、2017年)は「ナチ政権下の新映画体制で仕事を干されていたファンクは、日本からの突然のオファーに飛びつく」と、アーノルド・ファンクが1934年に『新しき土』の企画に乗った経緯を論じている。

映画『新しき土』の成り立ちとプロパガンダの性質については、まだまだ議論の余地がありそうだ。